第36回

少年の主張大会

作文集

高浜市

高浜市教育委員会

令和元年６月２９日（土）

午前９：００～

毎年開催される「少年の主張大会」も今年で第３６回を迎え、本大会を通して、これからの高浜を明るく照らすような青少年の表情に触れることができ、大変うれしく思います。

最近ではめまぐるしく変わっていく社会の中で、ネットワークメディアへの過度の依存などにより、大人も子どもも自分の世界に閉じこもり、知識や情報を実体験から得ることが少なくなってきました。人間関係の希薄化や心身の健康への影響も指摘されております。

子どもの頃から、自分の意見をしっかり持ち、意見の異なる他者を受入れながら物事に取り組んでいくことで、コミュニケーション能力を養い、新しい時代への生きる力にあふれた次世代を築くことに繋がることでしょう。

まずは、わたしたち大人が地域の中で子どもたちに目を向け、社会全体で子どもを育てるという意識を持ち、他者への思いやりや生命を大切にする態度を示すことが重要ではないでしょうか。

最後になりましたが、本大会を開催するにあたり、お力添えをいただきました皆様に深く感謝申し上げます。

高浜市長　　吉岡　初浩

高浜市の少年の主張大会も第３６回を迎えました。本大会での発表を通し、社会を深く見つめ、体験や見聞を通して実感し、自分の将来の夢や希望に対して強い信念をもって現実化していこうとする青少年のたくましさを感じます。

近年、インターネットやスマートフォンは多くの世代にとって必要不可欠なものとなっています。それらは正しい用途に使うことができれば便利なものですが、残念ながらトラブルのきっかけになることもあります。私は子どもたちが、友人関係のトラブルに巻き込まれ悩んでいるということを耳にすることがあります。自分の思いや考えをうまく伝えることができたら、トラブルにならないのではないかと感じます。このような場を通じて、言葉にのせて、自らの思いを表現し、同年代の他者の思いや考えを知ることにより、相手を思いやることにつながるのではないでしょうか。そして、大人は若者たちの正義感や新鮮な感性からつむぎ出される表現に胸を打ち、次代に託すにふさわしい社会を実現しなくてはならないとの自覚を新たにします。

結びになりますが本大会を開催するにあたり、明日に期待を抱きお力添えをしていただきました皆さまに深く感謝申しあげます。

高浜市教育委員会
教育長　都築　公人

もくじ

小学生の部

☆大切な人と反こう期　高浜小学校6年　今住　瑠南　……　2

☆心の底からありがとう　吉浜小学校6年　内藤　優空　……　3

☆安心･安全な町にするために　高取小学校6年　宮島　健　……　4

☆今後のわたし　港小学校6年　堀　真優起　……　6

☆おじいちゃんの言葉　翼小学校6年　榊原　成星　……　8

中学生の部

☆私の在り方　高浜中学校3年　岡本　春香　……　9

☆負けない、努力宣言　南中学校3年　水野　あすか　……　11

高校生の部

☆物事の見方について　高浜高校3年　本多　真也　……　13

（司会）高浜中学校3年　加藤　凜
南中学校3年　近藤　彩羽

〔敬称略〕

大切な人と反こう期

高浜小学校６年　　今住　瑠南

みなさんは、大切な人はいますか。私は、そういう大切な人がいます。それは、いろいろなところでお世話をしてくれたり、ここまで私を成長させてくれたり、守り続けてくれたりした人です。その中でも一番大切なのは「家族」です。

家族は、私が小さいときからここまで育ててくれた一番大切な人たちです。私は生まれた時からぜんそくもちでした。ぜんそくで入院しているときに、家族はほしいものを買ってきてくれたり、ずっとそばにいてくれたりしました。また、入院中に困っていることがあったら、やさしく声をかけてくれました。私はうれしくてありがとうといつも言っていました。そして、たくさん心配をかけたけど、家族は今でも私を見守ってくれています。

このように、私には自分にとって大切な家族がいます。みんなにやさしくしてもらって、私はここまで成長することができました。家族やたくさんの人のおかげで、私は笑顔になれる日がとても多くなりました。

しかし、私はたまに反こうすることがあります。そう、「反こう期」です。いつかきっとみんなにもこの「反こう期」というものがおとずれます。今、私は反こう期で反こうしてばかりです。なにか言われても、すぐに言い返してしまったり、何回か言われないと返事をしなかったりして、いつも家族をおこらせてばかりです。そんな時、心の中ではそんなことわかってるよと思っているし、自分では悪いと思っているのに、なぜか納得できません。それが反こう期なのでしょう。でも私はこういう自分がきらいです。私は、家族に反こうしかしていないような気がしています。あまり家族を大切にできていないし、感謝を伝えられていないのではないかと思います。大切な人に、感謝を伝えようとしても伝えられないのは、自分でもよくわかりません。何となく伝えられないのだと思います。そして、つい反こうしてしまいます。でも、いつかきっと感謝を伝えられる日がくると思います。みなさんも大切な人に感謝を伝えられる日がきっとくるはずです。それはいつになるかわかりませんが。

私は大切な家族のおかげで幸せになれました。だから、私も大切な家族をこれから先、ずっと大切にして、もっと成長できるようにがんばりたいです。そして、「感謝」という二文字を忘れずに、必ず伝えていきたいと思っています。

私はたくさんの人に守り続けてもらってここまで成長できたことをとてもう

れしく思っています。このうれしい気持ちから、私はこれから、もっともっといろいろなことをがまんできるようになりたいです。きょうだいにもやさしくできるようになりたいです。そして、家族やみんなの役に立てるような人になりたいです。この気持ちを日ごろからもって、家族だけでなく、たくさんの人に「ありがとう」という感謝の言葉を伝えて、恩返しをしていきたいです。

心の底からありがとう

吉浜小学校６年　　内藤　優空

　みなさんは幸せですか。私は幸せです。なぜなら、お母さんとお父さんの子どもに生まれることができたからです。

　私のお母さんは、私を産んで五日後に心臓が止まり、天国に行ってしまいました。その時の記おくは私にはありません。お父さんやみんなが悲しむ姿、お母さんの姿も記おくにありません。記おくにないはずなのに、お母さんのことを思い出してしまうと、なみだが自然にあふれてきてしまいます。なぜなみだがあふれてくるのかは分かりませんが、私の心の底には、お母さんとの五日間の思い出があるからだと思っています。

　お父さんは、いつも私のために仕事や家事を両立してがんばっています。それなのに、お父さんは、いつも笑顔でいてくれます。そして、ソフトテニスを熱心に取り組んでいる私を、心から応えんしてくれます。

　私がソフトテニスの試合で負けてしまい、落ちこんでいるときには、お父さんは前向きな言葉をかけてくれます。

　おばあちゃんの友達には、

「大きくなったね。パパがんばったね。」

と言われます。私が気づかないところでも、お父さんは私のことを思ってくれているのかもしれません。ときには、おこられて素直になれないこともあるけれど、たのもしく尊敬できるあこがれのお父さんです。

　そんなお父さんは、お母さんが天国に行ったときに、どんなふうに思ったのだろう。きっと、ものすごく悲しんだと思います。でも、私はお父さんが悲しんでいる姿を見たことがありません。

　ある日、おばあちゃんから、

「お母さんがいなくなっちゃったとき、みんなも悲しんだけど、お父さんがいちばん悲しんでいたんだよ。」

と言われました。そこで、初めてお父さんの悲しみを知りました。同時に、そんな姿を私に見せないように、前向きに生きるお父さんをすごいと思うようになりました。

　私は、こわがりで泣き虫で、すごく負けずぎらいです。そんな私を温かく、ときに厳しく見守っ

てくれるお父さんが大好きです。
　お母さんは、私が生まれた五日後にいなくなりました。亡くなる直前のお父さんの写真は、私を産んでくれたことをだれよりも喜んでくれているようで、その笑顔はかがやいています。
　友達がお母さんの話をしていると、うらやましく思います。ですが、私のお母さんは、「お母さん」ただ一人です。天国にいるお母さん。大好きなお父さんの、大切なお母さんなのだから、きっと私のことをいつも見守ってくれています。だから、私は二人にとても感謝しています。私がくじけそうになったときは、いつも心の支えとなってくれます。
　しかし、最近感謝の気持ちを伝えていない気がします。小さい頃は、簡単に「ありがとう。」と言えたはずなのに。今は、「ありがとう」と言うのに、勇気が必要になりました。素直に言いたいのに、なぜだかはずかしいという気持ちが優先してしまいます。いちばん私のことを思ってくれていて、いちばん感謝の気持ちを伝えなくてはいけないのに。ありがとうの気持ちは、言葉に出さなくても伝わるかもしれないけれど、私は大好きな二人に心の底から伝えたい。
「お父さん、いつも笑顔で、前向きな生き方を教えてくれてありがとう。」
「お母さん、命をかけて私を産んでくれてありがとう。」
私は、お父さんとお母さんのように、いつも前向きに努力おしまず、笑顔で生きていきます。これからも私を見守っていてね。

安心・安全な町にするために

高取小学校６年　　宮島　健

　みなさんは、子ども１１０番の家がどこにあるのか知っていますか。子ども１１０番の家とは、不審者に会うなど、困ったときに子どもがかけ込むことのできる家のことです。ぼくは、これまで子ども１１０番の家がどこにあるのか、よく知りませんでした。
　でも、５年生の総合の勉強で、高取学区の防犯について考え、子ども１１０番について深く興味を抱くようになりました。今日は、このことについて、ぼくが学んだこと、感じたことを話したいと思います。
　防犯という視点で地域を歩くと、今まで見えなかったものが見えるようになりました。例えば、高取公民館の交差点の防犯カメラや狭い道、電灯の少ない田んぼ道などです。暗くて狭い道に防犯カメラや電灯がないのはちょっと危険だなと思うようになりました。それと同時に、安全のために道を電灯で照らしたり、防犯のためにカメラを設置したりする地域の方の努力に感謝の気持ちを

抱くようになりました。そして、何より心を動かされたのは子ども１１０番の家でした。これは、地域の方が依頼を受けたり、立候補してくれたりして、ぼくたち子どもの安全を守るためにしてくれている活動です。ぼくは、子どものことを思ってくれている大人がいることに対して安心できるなと思いました。

しかし、せっかくの活動も子ども１１０番の家を示す旗がきちんと付いていなかったり、旗そのものがなかったりしていました。みんなと町を歩きながら、

「あれ。ここは旗がないね。」

「これじゃあ、不審者に出会ってしまったときに逃げ込めないね。」

と、話しました。地図で確認すると、やはり旗がなくても１１０番の家として登録されているところがありました。旗がないことで子ども１１０番の活動が目に見えないのはとても残念なことです。子ども１１０番の家の方は、ボランティアでぼくたち子どもの安全を守ろうとしてくださる頼もしい味方です。ぼくは、もっと多くの人にこの子ども１１０番の家の活動を知ってもらいたいと思いました。

そんなとき、学級で「高取学区の安心・安全のためにぼくたちにできること」についての話し合いをしました。ぼくは、地域の調査のときに気になった１１０番の家のことをなんとかしたいと思いました。子ども１１０番の家の旗がきちんとついていれば、いざというときにかけ込むこともできるし、みんなの安全への意識を高めることができるからです。

話し合いの結果、ぼくは、子ども１１０番の家のチームになりました。先生と一緒に、登録してあるのに旗が掲げられていない家を訪ねて旗を掲げてもらうようにお願いしました。すると、旗がなかった家の方は、

「台風で旗が破れてしまったから、捨ててしまったんだよ。」

と、教えてくださいました。ぼくは、旗をずっと出し続けるのは大変なんだなと思いました。

ぼくたちは旗の取り付けを行いました。旗を付ける作業は思ったより大変でした。友達や先生と協力して旗をようやく付けることができたときは、とてもうれしかったです。そして、防犯のためには「思い」だけではなく、いろいろな「行動力」も身に付けないといけないと分かりました。

旗を取り付けた後、

「ありがとうございます。」

と、声をかけられて、達成感と同時に子ども１１０番の家の方ってすごいなと思いました。ぼくたち子どものために、子ども１１０番の家の活動をしてくださっているのだからぼくたちこそお礼を言う立場です。それなのに、ぼくたちの活動に対して感謝の気持ちを伝えてくださいました。こんな方がもっと増えるといいし、ぼくも、地域全体の防犯や安全をしっかり考えられるような大人

になりたいと思いました。

ぼくは、この防犯の学習や活動を通して、いざというときの備えが大切だと強く思うようになりました。犯罪の被害がゼロになるように行動できれば、みんなの安心・安全を守ることができるのだと思います。ぼくは、日頃から防犯の意識を高め、力をつけていきたいと思います。

今後のわたし

港小学校６年　　堀　真優起

「将来の夢はなんだろう。」６年生になり、小学校最後の一年であると同時に、中学生になるまであと一年ということを意識し始めました。中学校では勉強が中心となり、卒業後の進路のことも考えなければなりません。わたしは将来の夢がありません。どんな職業に就きたいのか、どんなことで人の役に立ちたいのかも考えていません。そう考えると将来の夢のない自分に、少しずつあせってきました。そう思ったときに友達に夢はあるのか聞いてみると、友達は、

「農業をやりたい。」

と具体的に夢を話していました。友達は、そのために努力をしています。農業の本を読んだり、実際に野菜を育てたりしています。このままでいいのだろうか。実際に夢に向かってがんばっている人の姿を見て、わたしはさらにあせりました。

わたしは一つの目標に向かって集中して取り組むタイプではなく、いろんな習い事をやっています。どれか一つにしぼってと言われたら、絶対決められません。学校でもこれがすごく得意だとか、この教科が一番好きということもありません。決め切れないということがわたしのだめなところなのでしょうか。わたしは、甘やかされすぎたのでしょうか。いろいろなことが分からなさ過ぎて、目が回りそうなくらい考え込みました。わたしの夢に最適なのは何だろう。周りの人達はどうやって将来の夢を考えていたのだろう。そう思ったわたしは、お母さんに小さいころの夢はあったのかと聞いてみることにしました。お母さんは、

「覚えてないけど、幼稚園の先生になりたかったのかもしれないね。」と言っていました。やっぱりあったんだ。「なんでわたしだけ夢がないのだろう。」不安に思いました。だから、お父さんにも聞いてみたくなりました。
「お父さんの将来の夢って何だった。」
そう聞くとお父さんは
「うーんとね、ないかな。」
と言いました。その言葉にびっくりしました。「今働いているのに夢がなかったってどういうことだろう。今の仕事はどうやって決めたのだろう。」と思いました。よく話を聞くと、お父さんはその時々によって「あれもいいかな。これもいいかな。」と思っていただけということでした。しかし、大学で東京に出て、一人暮らしをして、いろいろな人に出会って、仕事を決めたと話してくれました。わたしと一緒で夢はなかったけど、わたしの習い事と一緒で、やりたいことはいっぱいあったのだということを知り、少し安心しました。じゃあ担任の先生は、将来先生になりたかったから先生になったのだろうか。気になって聞いてみました。
「中学校までは建築士になりたかったんだよ。けど、いい先生に出会えて教師になろうと思ったんだ。」
早く夢を決めなくてはと焦っていたわたしは、その言葉を聞いて少し安心しました。
　わたしはお父さんみたいに最初は夢がなくても、大人になってからいろいろな人に出会って決めた人や、先生みたいに、途中で変わった人もいることを知りました。わたしは身近な人に話を聞き、自分の夢を考えるのにとても参考になりました。焦らなくてもいいんだ。今やれることをしっかりとやり、いろんな人と出会うことで自分の夢を決めていけばいいんだ。そう思えました。何が将来の夢につながっているのか、どの出会いが将来のわたしを変える大きな出会いなのか。今はまだわかりませんが、今の生活を大切にしていろいろなことに挑戦していきたいです。そして、今後のわたしについてこれからももっと考えていきたいです。

おじいちゃんの言葉

翼小学校６年　榊原　成星

ぼくは、小学校に入学してから、この６年間でいろいろな体験をした。うれしかったことや悲しかったこと、クラスみんなで団結したこと、喜び合ったこと。そして、後悔したこと、失敗したこと。

ぼくは、「あのときああすればよかったな。」ということが何回もある。その中でも、特に後悔しているのは、祖父がなくなったときのことだ。

ぼくはゲームが大好きで、ひまさえあればゲームをする。その日も、いつも通り学校に行って、いつも通り授業を受け、いつも通り家に帰っていつも通りにゲームをしていた。そんなとき、電話が鳴った。ちょうどいいところで電話が鳴ったため、ぼくは少しいらいらしていた。とりあえず電話に出ると、それは祖父だった。祖父は、２日前にあったマラソン大会の結果を知りたくて電話してきたらしい。ぼくは、目標の順位を下回ってしまい、少し沈んだ声でそのことを伝えたら、祖父は元気な声で、

「くよくよすんな。また次に向かってがんばれ。」

と言ってくれた。だが、ぼくはゲームを早くやりたいがために、適当な返事をして電話を切り、またゲームを始めてしまった。

そして翌日、いつも通り学校に行った。そして、いつも通り授業を受けた。いつも通り家に帰っていつも通りドアを開けた。

「ただいま。…え？」

そこには、だれかと電話をしながら泣き崩れている母がいた。

「ど、どうしたの？」

返事がない。そういえば、母が泣いていることなんてめったにない。どうやら、うれし涙じゃなさそうだ。しばらくし、冷静になった後で話をしてくれた。祖父がなくなったそうだ。最初は、うそだと思った。だって、きのうも電話をしていた。だって、あんなに元気な声だったのに。だけど、母の涙と顔は、ぼくに現実を教えてくれた。そのしゅん間、涙があふれてきた。なんでもっと話さなかったのか。なんで祖父じゃなく、ゲームを選んでしまったのか。後悔と涙で顔はぐしゃぐしゃになっていく。

だが、次のしゅん間、昨日聞いた祖父の言葉が胸をよぎった。

「くよくよすんな。また次に向かってがんばれ。」

ぼくはその言葉を思い出して泣くのをやめた。ぼくにいろいろなことを教えてくれた祖父。勉強、走ること。そして、何事にも協力してくれた祖父。だからこそ、泣いてはいけないと思った。

６年生になり、ぼくたちは市内陸上大会に向けて毎日一生懸命取り組んだ。陸上大会には限られた人数しか選手として出場できない。ぼくは何としても選手になりたいと思い、精一杯がんばった。選手発表の日、担任の先生が順に名前を呼んでいった。ぼくはどきどきした。でも、ぼくの名前が呼ばれることはなかった。ぼくは落ち込んだ。涙が出そうになった。そんなとき、祖父の言葉を思い出した。「くよくよすんな。また次に向かってがんばれ。」

選手発表のあと、先生が言った。

「陸上大会の補助員を募集します。競技には出られないけど、陸上大会を支える大切な仕事です。」

ぼくにもできることがある。ぼくは迷わず立候補した。こうして、補助員として陸上大会に参加することになった。ぼくの仕事は器具の準備や片付けをすることだ。リレーの決勝では、ぼくのクラスが走るレーンの準備をすることができた。気持ちよくスタートが切れるように、そんな思いをこめて準備をした。結果は優勝だった。クラスのためになれたと思い、ぼくはうれしかった。最後までがんばってよかったと思った。

これからぼくはもっといろいろな経験をすると思う。きっと、つらいことや悲しいこともあるだろう。でも、そんなときは祖父の言葉を思い出し、前を向いて、そのときに自分ができることを精一杯がんばろうと思う。

「もうくよくよしないよ。うまくいかなくても、前を向いてがんばるよ。だから、見守っていてね、おじいちゃん。」

私の在り方

高浜中学校３年　　岡本　春香

少し前まで私は「同情」という言葉が嫌いだった。本当に苦しい人は、同情されてもうれしく思わないだろうから。私が同情されるとき、私の痛みは理解されていない。そう思うから。

私はよく、失敗する。その度に、「人間なんだから当たり前のことだ、これはいい経験になった。」と、自分に言い聞かせている。そうでもしないと、自分の心が叫び出しそうになるから。もう辞めたい、と。

テストで思うような結果が出せなかったとき。吹奏楽部の練習で思うような音が出なかったとき。人間関係がうまくいかなかったとき。自分が失敗する度に、目標に届かなかった度に、なぐさめてくれる友人や家族の言葉は自分にとって大きな糧になるはずなのに。それでも

私は、その思いやりを心で拒否してしまう。「同情はかえって迷惑だ。」と。

よく言えば負けず嫌い、悪く言えばひねくれ者、そんな自分が嫌だった。性格は簡単には変えられるものではないとわかっている。「なんで私はこんな性格なんだろう。」「この後ろ向きな性格をなんとかしたい。」私の心は、いつも葛藤している。

最近、母とケンカした。自堕落な生活をしていた私に、三年生になったのにそれでいいのか、受験生としての自覚はないのかとどなった。どきっとした。反論できなかった。悔しかった。母は私のことを思って叱ってくれている。そうわかっていても、私の口からは反抗的な言葉が出る。なんで。

「うるさい。ほっといてよ！」

こんなこと言いたくないのに。反抗期のせいにできたらどんなに楽だろう。そう思うけれど、これがすべて反抗期によるものではなくて、自分の性格そのものが、母の言葉を拒否しているということを、私が一番知っていた。

思えば、私は最近、周りの好意を邪険にしてばかりだ。考えれば考えるほど、自分の勝手さに嫌気が差した。

このままではいけない。私は、自分の性格で悩んでいることを母に打ち明けた。ケンカしたばかりだったのに母はとても真剣に話を聞いてくれた。そして、

「あなたはやろうと思ったことを、思ったように取り組めばいいんだよ。」

と言ってくれた。

母の言った「やろうと思ったこと」とはなんだろう。私は今までずっと無理をしていたのだろうか。人に同情されるのが嫌いな理由は、自分にプレッシャーをかけすぎていたからだったのか。

よく考えてみれば、私のまわりの人たちは、決して私に無理な結果を求めてはいなかった。ただ応援してくれているだけだった。それなのに私は、それを重く解釈して、プレッシャーに感じていた。　それがわかった途端に、胸にあったつかえがするりと溶けた気がした。思えば、友人や家族は私に「無理しなくていいんじゃない？」と問いかけてくれる時も、何度もあったのに。

ああ、そうか。無理しなくていいんだ。やりたいことをやればいいんだ。

今までは、無理をしてでも成し遂げようと思っていた。でもこれからは、自分が心からしたいと感じることにたくさん挑戦しよう。これが私のモットーだ。興味をもつことに挑戦せず、後悔するのが一番嫌だ。だから私は、「やりたいことに素直になる」と決めた。これが私の結論で、決意だ。

社会に出ると、辛いこともたくさんあるだろう。理不尽なこと、納得のいかないこと、今までに経験してきた痛みとは比べものにならな

いほどの、たくさんな嫌な感情が飛び交う、広くて大きな社会。でも、たとえ難しいことであっても、「やりたいこと」や「挑戦したいこと」に対して、いつまでも素直でいたい。

負けない、努力宣言

南中学校３年　　水野　あすか

２０１７年、私が中学１年生だった頃、夏休みに書いた生活作文が市の文集に選ばれました。その作文の内容は、小学６年生の１年間、自分が不登校だったときのことです。そして、そんな私に優しく手を差し伸べ、中学校へ行くきっかけを作ってくれた周りの人たちの話です。けれど、その作文には書けなかったことがあります。それは・・・。

スマートフォンからブー、ブー、と聞き慣れたアラーム音が鳴る。同室で寝ている兄の機嫌を損ねないように、素早く画面をタップした。

４歳年の離れた私の兄は、私が不登校になり始めた小学校６年生の頃から家族への態度を変えた。家での夕食時に私が母と会話をしていると、兄はいつもチッ、と舌を鳴らすのだ。家族４人で外食へ行っても、わざとらしいため息をついたり、大きな咳払いばかりで、まるでその怒りを表しているかのようにみえた。兄が怒りっぽいのは母の遺伝、そして反抗期だから仕方ないんだ、と自分に言い聞かせていたが、なんとなく別の理由も思い当たる節があった。それは、私が不登校だったからだ。不登校の妹と一緒に歩くなんて、恥ずかしくて情けなくて嫌だったんだろう。私を睨む鋭い兄の目を見て、私はそう感じたのだ。人から受け入れてもらえないこと、ましてや家族である兄に拒絶されていることが、自分でもみっともなくて恥ずかしかった。でもそれ以上に、兄の私への態度が痛くて怖かった。その態度は、今になっても変わっていない。

中学３年の４月ごろのこと、インターネットで１０歳の不登校ユーチューバーの少年が話題になっているのを目にした。気になって彼の動画を開くと、淡々とした口調で自らを語り始めた。どうやら彼は、小学校３年生の頃から学校の宿題が嫌になって不登校になったらしい。私自身、同じような気持ちに何度かなったことがあるからこそ、そこまでは共感できた。けれど、「ぼくは、不登校は不幸じゃないと思う。むしろ嫌々学校に行っている人の方が不幸や。」という発言にひっかかりを感じた。その発言は、私が不登校だった頃と１８０度違う気がしてならなかったのだ。私が学校に行けなかったときは、どうして自分は

周りと比べてこんなにも劣っているのだろうかとか、たくさんの人に迷惑をかけて生きるのが嫌になったりだとか、でもやっぱり、周りからしたら死なれることのほうがよっぽど迷惑なんだろうなとか、不幸な気持ちになることばかりを考えていた。

でも、ちゃんと学校へ通い始めてからは、勉強についていくためには学校へ行かなければならないし、どれだけ勉強が嫌でもやらなきゃと気づくことができた。周りの人たちのおかげで学校に通えるようになった今、努力は必ず報われる、努力をすればするほど、大人になったときに良い結果がでるんだろうなって思えるようにもなった。前向きに思えるようになったのは、学校に通えるように手を差し伸べてくれた、友達や家族のおかげ。

でも、兄との関係はあの時からずっと止まったままで、同じ家に居るのが正直苦しい。だからこそ、私はこの現状を変えたい。家族の前では決して笑顔を見せない兄は、一体何を考えているんだろう、どうすれば昔みたいに仲の良い兄妹に戻れるんだろう、と私は悩み、考えを巡らせた。そうだ、笑顔にならないなら、家族みんなで笑顔になれるような環境を作っていけばいいじゃないか。自分から積極的に話しかけて、兄が心を開いてくれるまで私は絶対に諦めない。

私は兄と違って勉強ができるわけじゃない。運動だって得意じゃない。短所ばかりでこんな自分なんて大嫌いって放り投げてしまいそうな時もある。けれど、自分の人生は一度きり。やるなら生きてる今のうちだ。私は、兄に認めてもらうために努力することをここに宣言する。絶対に負けないからね、兄ちゃん。

物事の見方について

愛知県立高浜高等学校３年　本多　真也

「高齢者の運転する自動車が小学生の列に突っ込み、小学生が犠牲に」

近頃、このような高齢者による交通事故のニュースを見かけることが増えてきたように思います。高齢化が進む日本では、今後このような事故が増えると想像できます。このような報道を受けて、インターネット上で「高齢者は運転すべきではない」「高齢者は免許を返上しろ」という意見を多く目にします。皆さんは、この「高齢者の運転による交通事故」という問題について、どのような意見をもっているでしょうか。

多くの人は、ニュースなどの情報を得る時には、テレビやスマートフォンを利用していると思います。このような「画面越し」に得られる情報は、手に入りやすい反面、ニュースの内容がどこか遠い所で起こっているという印象を受けます。私は、高齢者による交通事故の増加を理由に「高齢者は運転をすべきではない」という結論を安易に出してしまうのは、事件を「画面越し」に見ているため、多くの人は車を運転する高齢者が実際に置かれている生活環境を考慮していないのではないかと思いました。そして私は、「実際には免許がなければ自分の周りのお年寄りは生活に支障が出てしまうのではないか」とも考えました。ある時、祖母に高齢者の運転について聞いてみると、「都会の人は車がなくても生活ができるかもしれないけれど、田舎だと家族が近くにいないと車なしでは生活ができなくなってしまうんだよねえ。」と話してくれました。祖母の話を聞き、やはり「高齢者は免許を返上しろ」というインターネット上の一方的な意見だけでは、この問題の根本的な解決にはつながらないことがわかりました。

このような「物事に対して複数の視点を持つこと」「当事者の立場に立って考えること」の大切さについて、私自身の学校生活においても気づかされることがありました。

私は、中学生の頃からボランティア部に所属しています。部活動では、ボランティアを通して、多くの方と触れ合うことができます。その中でも、私は高

齢者の方との関わりにおいて考えさせられる経験をしました。高浜高校のボランティア部では、定期的に「あっぽ」という高浜市の地域共生型福祉施設に訪問させていただいています。ここでは自分たちで考えたレクリエーションを高齢者の方と共に行います。以前、事前の準備を十分にしたつもりでも、本番で自分たちの説明が早かったり説明不足であったりして、レクリエーションが円滑に進まないということがありました。この経験から、自分はこれまで「このくらいの説明があればわかってくれるだろう、きっとわかるはずだ」という自分の一方的な思いで準備をしており、実際の高齢者の方の立場の視点が足りておらず、行き届いた対応ができていなかったことに気がつきました。自分の頭の中で作り上げた想像の高齢者の姿だけでなく、実際に目の前にいる高齢者の方の表情や会話によく目と耳を向けて対応することが大切であると改めて感じました。

皆さんはこれまで、複数の視点から物事について考え、自分の意見をもつことができていたでしょうか。私たちはこれから、この高齢化が急速に進行する日本を引っ張っていく世代になります。これからは冒頭で述べたような高齢化に伴う問題も増えていくと思います。また、医療や科学のさらなる発展により、例えば出生前診断の是非など、これまでにない問題や倫理についてさまざまな主張が飛びかう場面も増えてくるでしょう。社会で起こる問題は、決して「画面越し」の他人事ではありません。私たち若者一人ひとりが「自分の意見をもつ」ということが何よりも重要になると思います。そしてそれは、一方的な意見を相手に押しつけるのではなく、「一つの物事に多くの視点をもつこと」で、すぐには解決できない問題に対して、考え合い、よりよい向き合い方の糸口を見つけるきっかけになると考えます。私は「一つの物事を複数の視点で見て、自分の意見を持つ」ということを大切にしていきたいです。

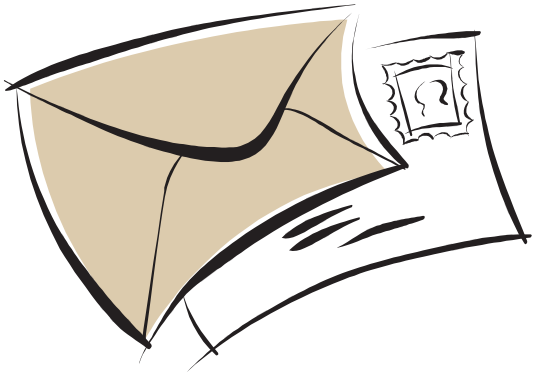
あとがき

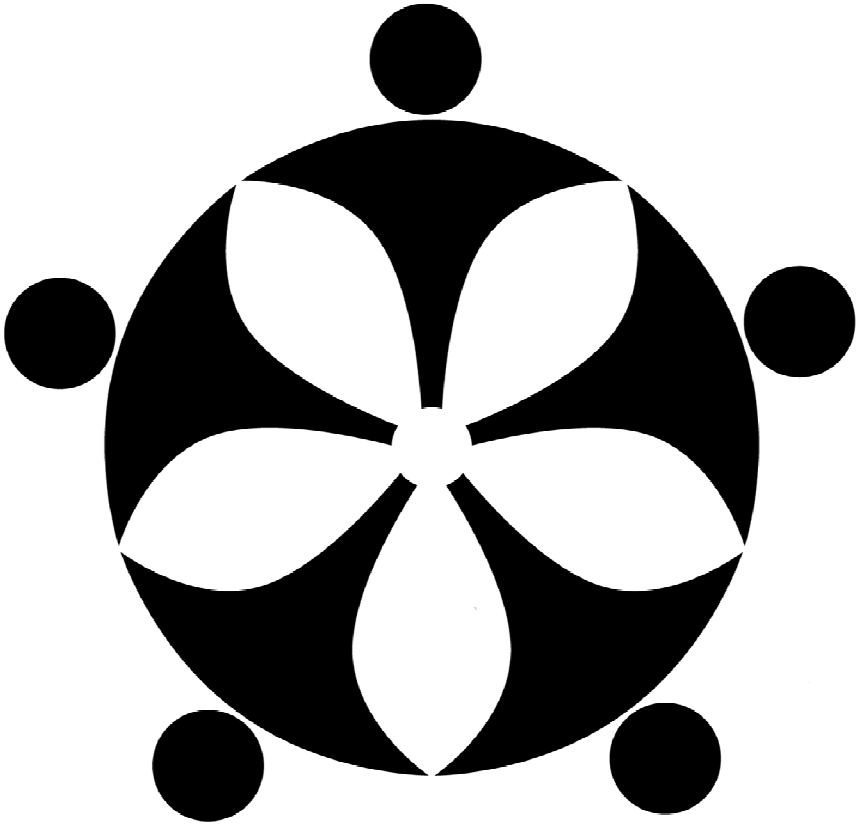
この冊子は、各校から送られてきた少年の主張作文原稿をもとに作成しました。少年の主張大会当日の発表の言葉と異なる場合もありますので、ご了承下さい。

発　行　　令和元年6月

発行者　　高浜市青木町四丁目1番地2

高浜市･高浜市教育委員会





ちょうどいいまち
ちょっといいまち

これまでもこれからも

2020高浜市50th